

5. ブルーベリー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梅宮, 拓巳 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46927

5. ブルーベリー

梅宮 拓巳

1. はじめに
2. ブルーベリーの導入と発展
3. ブルーベリー栽培
4. ブルーベリー関連の組織
5. ブルーベリー農家
6. 考察
7. おわりに

1. はじめに

今回調査を行った旧柳田村上町地区は海に面しておらず、この地域では農業が生活に大きな影響を与えている。地区の方々にお話を伺う中、農家の方から田んぼで米を育てている（育てていた）というお話とともに、「ブルーベリー」がお話に上がったことがとても印象深い。地域で古くから育てられていたものではなく、近年に地区に根付いた作物でありながら、早くも地区の農業の中で大きな存在感を示し、「特産品」の地位を獲得している。

以下では、地区にブルーベリーが持ち込まれた経緯や地区での栽培方法、関連組織などについて記していく。

2. ブルーベリーの導入と発展

はじめに地区の農業へのブルーベリー導入・発展の経緯を大まかに述べる。

ブルーベリーは、今では能登町を代表する特産品となっている。旧柳田村は、能登半島にありながら海に面していない中山間地、さらには過疎化が急激に進んでいたこともあり、早くからブルーベリーに注目していたという。

『柳田村 30 年のあゆみ』（2005 年）によると、ブルーベリー栽培が旧柳田村で始まったのは昭和 58（1983）年、柳田村商工会長や農協組合長を務めた駒寄孝造さんが旗振り役となったという。ブルーベリーの本格的な栽培が始まったのは 1989 年。2005 年には約 80 戸の農家が生産に携わり、11ha の農場で約 10t の生産量を誇るまでに成長したという。柳田村と柳田村農業協同組合が商品化を進め、平成元（1989）年から販売しているブルーベリーワインは、平成 8（1996）年にワイン醸造工場が上町地区に完成し、量産体制が整った。この工場は第三セクターである柳田食産が運営しており、全国に 2 万本以上を出荷していた。また、黒川地区のふれあいの里公社モデル農場では、ブルーベリーなどの試験栽培に取り組んでいる。

平成 3 年（1991）に柳田村ブルーベリー協会が発足。5 年（1993）には植物公園で「全国ブルーベリー祭」、16 年（2004）6 月には日本ブルーベリー協会発足 10 周年を記念した産地シンポジウム「ブルーベリー in やなぎだ」が開催され、旧柳田村は県内外から「ブルーベリーの里」として知られるようになった。

また、浦山（2016：35）によると、旧柳田村では約 90 軒の農家がブルーベリーを行っている（2015 年時点）。ブルーベリーは手摘みでの収穫が大変であるため、一人が栽培できるのは 100～150 本である。一人一人の栽培面積の平均は約 80a である。最大の農家は 30a で 600 本のブルーベリーを栽培しており、企業としては 1.3ha で 1,500 本のブルーベリーを栽培している柳田食産が最大である。

3. ブルーベリー栽培

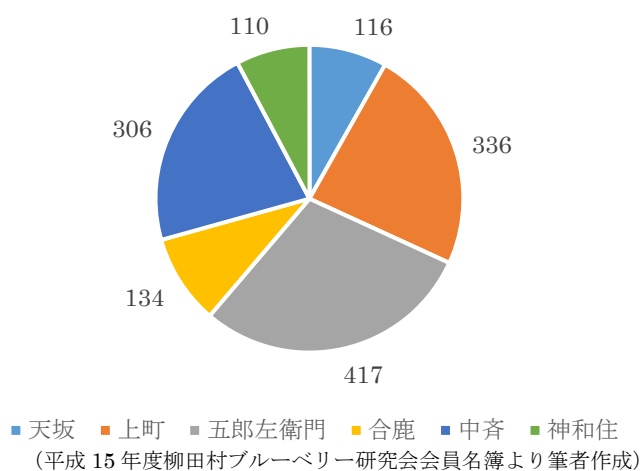
ここでは、上町地区において実際にどのような栽培方法がとられているのかを、聞き取り調査で得られた話や資料を中心に述べていく。

3.1 上町地区におけるブルーベリー栽培

まずは、上町地区における栽培状況について触れておく。

右の図は、上町地区における平成 15（2003）年度地区別ブルーベリー栽培本数の割合である。見ると、五郎左エ門分で 417 本が栽培されており、上町地区ではトップである。次いで上町地区（336 本）・中齊地区（306 本）、3 地区と差が開いて合鹿地区（134 本）・天坂地区（116 本）・神和住地区（110 本）と続いていく。

表1 平成15年度ブルーベリー農家（個人）栽培本数



このグラフは個人農家のみでの栽培本数であり、これに植物公園と柳田食産での栽培本数を合わせると、上町全体で 2,941 本が栽培されていた。

続いて、旧柳田村全体における上町地区の栽培状況を見る。上町地区（天坂、上町、五郎左エ門分、合鹿、中齊、神和住の合計。グラフ左上）は、個人農家では全体の約 11%、植物公園・柳田食産の栽培本数を含めると約 22%となり、およそ 4 分の 1 を占めている。これは五十里地区（グラフ右下）のパーセンテージと同等となり、上町地区は旧柳田村における主要産地の一つだったと言える。

柳田地域では、ブルーベリーが病害虫に強いことから無農薬で栽培している。このため、毛虫などが発生した場合は、人の手によって除去している。予防が出来ないため、この害虫駆除が一番大変な作業であり、Aさん夫婦は6月～7月にかけて、2人で手作業で行っている。果実は完熟したものから手摘みしている。

3.3 ブルーベリーの栽培管理

先程述べたように、柳田ではブルーベリーの無農薬栽培に限られている。では、そのためにどのような栽培管理がされているのか。以下、ふれあいの里から配布された資料やブルーベリー研究会にて作成された資料をもとに記していく。

基本管理

ブルーベリー研究会にて発行された資料によると、資料肥料は1ヶ月に1度の割合で施用し(年6～7回程度)、株元より30cm以上はなれて施肥する。肥料には、ブルーベリー専用に作られた肥料である「ブルーベスト」の他、通常は野菜専用肥料として使われている「FTE 燐加安 A928号」、「硫安」「イオウ粉末(イオウ華)」が用いられる。

剪定は、樹の生育を調整するため、管理作業の効率を上げて病害虫の被害を軽減するため、樹の若返促進と経営の安定を図ることが目的である。植付け後3年間は必要としないが、元気なシュート(主軸枝)は切り詰める。同様に、樹を早く成長させるため、植付け後2年間は全ての花芽を摘花する花芽処理、害虫駆除を兼ねるため、必要に応じて刈り取り(除草)も行う。

また、6月中旬までに有機物を使用したマルチングを行う。マルチの厚さは10cm以上にすること。材料費の軽減のため、材料としてモミガラ、バーク、稲藁などを使用する。マルチのない園では、夏期の干ばつ被害防止のため、1樹に対して50リットル程度、随時灌水する。

上のスケジュールにあるように、11月～12月には紅葉後で降雪前に必ず雪囲いを施し、新枝の雪害防止につとめる。その後、3月以降、気温が上昇してきたら速やかに雪囲いの撤去を行う。

木材チップについては、平成11(1999)年にモデル農場にて木材チップ活用実験、使用を開始。その後、平成15(2003)年、生産普及センターから木材チップの使用管理基準について設定・周知が行われた。『広報のと』(平成24年8月号)によると、モデル農場の元農場長Dさんによって、国内で初めて木製チップによる栽培法が確立された。

交付された資料によると、原材料の種類は能登地域で入手出来る針葉樹に限定され、その中でも化学的な塗料、釘類、ベニア類、金属、ビニール類、プラスチック類等の付着していないものを材料として使用する。

チップの製品規格・使用量に関しても細かく定められている。製品規格は、チップの

中の樹皮含有率は10%以内。枯葉、青葉等の葉部含有率は5%以下。チップ一個あたりの厚さ1cm、幅は1.5cm、長さ5cm以内。使用量に関しては、新規植栽園は畑地、開発地では厚さ50cm、水田転換園では根腐防止のため70cm程度。既設管理園はマルチ資材としての使用（補充含む）は既設敷厚を含め株元より地上15cm以内、畝間投入資材としての使用は15cm以内、50cm・70cmの敷厚園では消耗した量のみを補充、不要なチップを堆積してはいけないとされている。

チップの購入に関しては、購入先は地元地域の木くず中間処理施設より購入すること。購入価格は毎年度ごとに研究会と生産工場の両者協議の上1年間の売買単価を定める。売買単価は生産工場内での価格と定め、その他必要経費については内容ごとに支払うとされている。

チップの搬入は生産農家個々に運搬することを基本とし、運搬車両は自己所有者、または研究会所有のものを使用するようにと書かれていた。

「ブルーベリー苗」補植後の管理についても、ふれあいの里公社から栽培に関して農家へのアドバイスがなされている。具体的には、植え付け後は5月末まで肥料を与えない、一回に与える量は20gを月に1度ずつ9月まで施用する、といった内容である。

3.4 ブルーベリー栽培と品種

柳田で用いられているブルーベリーの品種については以下のとおりである。

ブルーベリーの栽培は、柳田村農業振興作物であったため、モデル農業の一環としてに始められた。ブルーベリーには大きく分けて野生のワイルドブルーベリー、ハイブッシュブルーベリー、ラビットアイブルーベリーの3種がある。

柳田食産のホームページによると、ハイブッシュブルーベリーは寒冷地に強く、夏の暑さや乾燥に弱い品種。樹の高さは1.5m程度である。ラビットアイ系と比べて、大玉品種で果皮が柔らかく食感が良いが、軟化しやすい欠点がある。能登町柳田地域では、7月から8月中旬にかけて収穫でき、能登町ではパトリオット・デューク・エリオットなど31品種が栽培されている。

ラビットアイブルーベリーは温暖地に向き、樹の高さは3mほどになる。中玉品種で果皮がやや固いが、糖度があり加工品に向いている品種。能登町柳田地域では、8月から9月下旬にかけて収穫でき、能登町ではウッダード・ホームベル・ティフブルーの3品種が栽培されている。実は緑色→紫色→青色と変化しながら熟していく。

ローブッシュブルーベリーはハイブッシュ系よりもさらに寒冷地、主に北米で野生している品種。産業的な栽培が難しいせいで、改良品種は少なく、日本ではほとんど栽培されていない。

また、浦山（2016：35）によれば、ハイブッシュブルーベリーは寒い地域に適したブルーベリーであるが水に弱いため、もともと水田に植えていたが、3年ほどで枯れてしまった。それを改善するために1996年に渡米し、そこでヒントを得てチップ栽培を考

案した。腐りにくいリウニンという有機物を含む針葉樹のチップを用いる方法であり、10～15年は同じチップを使い続けることができるという。

4. ブルーベリー関連の組織

柳田でのブルーベリー栽培には、いくつかの組織・企業の存在が大きなものとなっているように思う。ここでは、それぞれの組織について概要とともに、どのような活動を通して農家と関わりを持っているのかを記していく。

4.1 ブルーベリー生産組合

聞き取りにて伺った話によると、平成27(2015)年時点で、組合員数は90戸、町内栽培面積は12.2ha、植栽本数は13,000本(組合未加入者を含むと15,000本)、年間生産量は25tである。組合員の年代は40歳代が2%、50歳代が9%、60歳代が40%、70歳代が36%、80歳代が13%となっている。ブルーベリー生産組合には旧柳田村の64のブルーベリー農家が現在会員になっている。会員は、会費として年に3,000円を納めている。

会員の農家の間では無農薬栽培など栽培方法が徹底して統一されているため、柳田食産では生産組合の会員により生産されたブルーベリーしか取り扱っていない。

生産組合には能登ブルーベリー普及センターが併設されており、生産者の育成に取り組んでいる。生産者には補助金が出るので、苗木を1本3,000円で買うことができ、1年で1本の苗木から2～3kgのブルーベリーが採れるため、1年で元が取れるという。また、ブルーベリーはpH5～4の酸性の土壌を好むことから、土壌改良のためのピートモスも提供している。品種についても、柳田の地に合うような品種を選定して提供している。

4.2 ブルーベリー研究会

平成2(1990)年に柳田村ブルーベリー研究会が発足する。当時は会員数は24名であった。Aさんによると、ブルーベリー研究会は重年地区の田原さんが始めた。柳田・田代・当日・大箱・黒川・五十里・石井・国光・鴨川・長尾・鈴ヶ嶺・桐畑・笹川・天坂・上町・五郎左エ門分・合鹿・中斉・神和住の19地区で構成されている。現在(2016年)、84軒の農家が所属している。

また、Bさん(上町、男性、64歳)の話では、通年の活動内容として毎年4月に行われる春の剪定講習会、6月初め実の状況確認、柳田食産からの注意事項の確認等を行う出荷会議、6月20日頃から行う収穫を経て、10月頃に虫害など、その年の収穫を振り返る出荷反省会、11月頃の秋の剪定講習会がある。春と秋の剪定講習会に関しては、講師に田原義明さんを招いて行う。

4月に年1回の総会が開かれ、決算報告などが行われる。東京農大の教授を招いて勉

強会を開いたこともある。研究会会長の改選・再選も総会の話し合いをもとに行われる。任期は2年である。

研究会への加入は強制ではないが、一定以上の本数を栽培する農家には加入を促している。加入のメリットとしては、講習会への参加や柳田食産への出荷ルートが挙げられる。

4.3 能登ブルーベリー普及センター

浦山（2016：35）によると、元々は産業開発モデル農場という名称だったが、2006年に「ふれあい公社」、2011年に「能登ブルーベリー普及センター」という名称に変更されている。能登町農林水産課より管理委託を受けて、植栽や栽培の普及、苗木の生産・販売、新種の適応性調査、農家への適期剪定指導、肥培指導、各種講習会の実施を行っている。

ここでは果樹や野菜を試験栽培しており、2015年時点でワイルドブルーベリー、ハイブッシュブルーベリー、ラビットアイブルーベリーの3種をかけあわせて作った20種のブルーベリーを試験中。試験は木が成長するまでの4～5年と、結果が出るまでの4～5年の合わせて10年ほどかかる。この試験結果が良ければ、新しい品種を農家に進める予定である。

また、『広報のと』（平成24年8月号）によると、平成4（1992）年のモデル農場での苗木の生産開始、平成6（1994）年の果実の集荷・販売開始、平成11（1999）年の木材チップ活用実験、平成15（2003）年の木材チップ使用管理基準の認定など、柳田のブルーベリー栽培の歴史の中で大きなかわりを持っている。

4.4 柳田食産

柳田食産は平成7（1995）年に設立され、その後、平成8（1996）年にブルーベリージャム、平成9（1997）年にブルーベリーワイン、平成10（1998）年にブルーベリーアイスクリーム、平成11（1999）年にブルーベリーワインゼリーといった加工製品の販売を開始している。製造工場にてワインの工場見学を行っているほか、今年からカフェ・売店が併設されており、加工製品を販売している。浦山（2016：36）によると、設立前は柳田にワインの製造の知識を持つ人がおらず、九州の焼酎屋に委託して開発した。それから生産が盛んになるにつれて、柳田の中で製造を行えるようにするため、会社が設立されたという。第三セクターであり、会社の株の39%は能登町が所有している。

平成8（1996）年に果実の集荷・販売業務を開始。旧柳田村の農家からブルーベリーの回収を行っており、高齢者が多いため、車で出向いて回収も行っている。農家の方は、夜にいたみや傷のない、柔らかいブルーベリーを選別、翌朝に出荷を行っており、一回の選別で約100kgを選別、夜2時までかかる場合もある。昨年は18tを集荷したが、春先が寒いなど、天候の条件によっては7tになることもある。

柳田食産におけるブルーベリーワインの製造工程がホームページで紹介されていたため、ここでも取り上げる。

1. 粉碎

摘み取ったブルーベリーの実をよく洗い、皮ごと粉碎機にかける。ここでのワイン仕込みは年4回行われる。

2. 一次発酵

粉碎したものに酵母を加え、タンクに入れる。タンクを常時 15~17℃に保ち、発酵を促進する。ここで使う酵母は、ブルーベリーワインに合うように低温発酵出来るもの、フルーティさがあるもの、香りの吸収が良いものというポイントから選んでいる。

3. 攪拌

一次発酵は約2週間かかり、その間は毎日朝晩攪拌する。そのときどきの季節に応じて期間も変わり、ワイン作りの決め手となる。ここでは朝晩2回、科学的な分析を行い、発酵期間を決めている。

4. 搾汁

一次発酵が終わったあと、汁だけを絞る。

5. 二次発酵

汁だけをタンクに入れ、さらに発行する。この間も毎日朝晩に分析を行い、発酵に最適なタイミングをはかる。発酵が完了したら温度を2~3度にかけて発酵を止め、ワインを落ち着かせる。

6. 濾過

搾汁で取りきれなかった種や皮のかけらなどを取り除くために行う。間隔を開けながら3回行う。

7. 貯蔵

醸造が終わったワインは、貯蔵タンクで2~3ヶ月寝かせる。ワインの大瓶で6千本相当のワインが入っている。

8. 瓶詰め

タンクから直接、殺菌機を通り、瓶に詰めるオートシステムを導入しており、雑菌などが混入するのを防いでいる。

5. ブルーベリー農家

今回の調査において、ブルーベリー農家の方に直接お話を伺うことができたため、以下、お話いただいた内容を記していく。



A さん (中斉、男性、74 歳)

写真1 ブルーベリーワイン 2016年8月筆者撮影

栽培を始めたのは 1999 年頃で、人にすすめられたことがきっかけで始めた。モデル農場が農家に行った募集に参加、水田を埋めてモデル農場の職員にブルーベリーの樹を植えてもらった。もらった苗を挿し木で増やし、実が安定してできるようになるまでに 3 年かかった。5 年目がいい出来だった。最初に 200 本の樹をもらったが、管理が大変で、木が枯れてしまったため今は減少している。米と違って、柳田村のなかで前例のないスタートに不安を感じていたが、今は慣れた。

B さん（上町、男性、64 歳）

田が荒れ放題になってしまっていた時、田を何とかしようとして五十里地区でブルーベリー栽培をスタートさせた。知り合いの勉強熱心な方が言い出した。東京農業大学の、ブルーベリーに詳しい教授を呼んで勉強会を開き、ブルーベリーの効用や栽培方法について栽培者で学んだ。

C さん（中斉、男性、71 歳）

ブルーベリー栽培を始めたのは昭和 51（1976）年。当時役場の農林課に務めていたため、ブルーベリー栽培を普及させるために自分の田んぼの真ん中に展示園をつくった。その際、玉田孝人教授に指導してもらった。その後、柳田村ではブルーベリーの栽培をする農家が一気に増えたが、それはその頃減反政策で田んぼの転作をする必要があったためである。

ブルーベリーの出荷は、柳田食産に行っている。柳田食産ができる前は個人的に売るなど、どこも大量には生産していなかった。ブルーベリーにも年によって表裏があり、去年（2015）は表で出荷量は 20t くらいだった。

6. 考察

本章の初めに述べたように、ブルーベリーは昔から根付いていた作物ではない。本格的に栽培が開始されてから 30 年も経っておらず、歴史の浅い作物と言える。しかし、日本全体におけるブルーベリー栽培の歴史を見てみると事情は変わってくる。農林水産省の「平成 22 年度特産果樹生産動態等調査」によると、能登町でブルーベリーの栽培が開始した昭和 58（1989）年における日本全体のブルーベリー栽培面積は 37ha、収穫量は 22t となっている。また、同資料の昭和 51（1982）年時の栽培面積が 1ha であることから、ブルーベリーは日本全体でみても歴史の浅い作物であり、早い段階で能登町において栽培が着手されたことが分かる。

また、ここで改めて柳田村におけるブルーベリー栽培の歴史を振り返ると、柳田食産の設立を機に、施策の方針に少し変更が見られるように思われる。

柳田村で栽培が開始されてから翌年の平成 2（1990）年には柳田村ブルーベリー研究会が発足、平成 7（1995）年に「柳田食産株式会社」が設立され、能登町での新規栽培農家への助成事業が開始するなど、栽培開始から 6 年の間で、柳田村含む能登町をブルーベリー産地とするための、いわば「下地作り」が行われ、それから平成 9（1997）年

の「柳田ブルーベリーワイン」誕生、平成 11（1999）年の木材チップ活用実験、平成 16（2004）年の能登産ブルーベリーの育種業務への着手といった「能登におけるブルーベリー栽培」の追求へと発展していったと考える。

柳田食産と上町地区との結びつきは、平成 8（1996）年に柳田食産が上町に事務所・工場を移転し、果実の集荷・販売を開始したことで生まれたと言えるだろうが、平成 28（2016）年にマルシェとカフェを併設したことでより一層強くなったものとみられる。植物公園と隣接していることもあり、柳田ブルーベリー関連の製品が住民にとっても町外の人々にとっても身近となるのではないだろうか。

そしてさらに、平成 16（2004）年の第 10 回全国産地シンポジウム「ブルーベリー in 能登半島」開催、平成 24（2012）年の全国産地シンポジウム in 秋田や MRO 旅フェスタといったイベントへの参加など、新たに「ブルーベリー産地としての能登町の発信」という局面を迎えているように思われる。柳田食産における新商品の開発や通信販売も行われ、能登以外の人々へとブルーベリーを広めるための尽力がなされており、能登ブルーベリーのブランディング化に向けて展開が進められている。

今後のブランディング化のさらなる発展において、新商品開発とともに新種ブルーベリー開発は重要な役割を果たすことになるだろう。能登にしかないブルーベリーが生まれ、ブルーベリーの産地として大きく発展することが望まれる。

7. おわりに

本章では、柳田におけるブルーベリー栽培の歴史・現状について述べてきた。農家の方々からお話を伺った際に感じたこととして、ブルーベリーが上町の暮らしに違和感なく溶け込み、大きな存在となっているということである。稲作が主だった上町地区において、しかも日本においても前例のない作物を育てることには農家の方々にも多大な苦労があったかと思われるが、現在は地区の特産品として地域に根づいている。これには、様々な人物や組織の尽力があつてのことだと強く感じた。

最後に、お忙しい中調査に協力して下さった上町地区の皆様にご感謝を申し上げます。ご協力いただき、本当にありがとうございました。